

基本簿記演習改訂版 解説

第1章 複式簿記の基礎 P.4

第1節 簿記の役割／簿記の用語 P.4

基本問題 P.4

問1

(2)

POINT 損益計算書…経営成績
貸借対照表…財政状態

第2節 資産・負債・純資産と貸借対照表 P.5

基本問題 P.5

問1・問2

POINT 資産 … 財貨と債権（貸付金・売掛金）
負債 … 債務（借入金・買掛金）
純資産（資本） … 資産から負債を差し引いた額（資本金・繰越利益剰余金）

問3（省略）

問4

〔解答の手順〕 期末貸借対照表を作成する。

1. 資産を借方に記入する。
2. 負債を貸方に記入する。
3. 純資産を記入する。
 - ①最初に「資本金 50,000」を記入する。
 - ②借方の資産合計（¥205,000）から貸方の貸方合計（¥115,000）を差し引いて、期末の純資産（¥90,000）を求める。
期末の純資産（¥90,000）から「資本金 50,000」を差し引き、「繰越利益剰余金 40,000」と記入する。

【別解】 資料の現金¥18,000 から資本金¥50,000 までを貸借対照表に記入し、その差額 ¥40,000 を「繰越利益剰余金 40,000」と貸借対照表の貸方に記入してもよい。

- ・ 当期純利益の計算
期末の繰越利益剰余金¥40,000 から期首の繰越利益剰余金¥30,000 を差し引いて求める。

練習問題 P.6

問1

- 〔解答の手順〕
1. 01年4月1日（期首）の資料から繰越利益剰余金を計算する。
現金 商品 備品 借入金 資本金 繰越利益剰余金
¥400,000 + ¥150,000 + ¥200,000 - ¥250,000 - ¥400,000 = ¥100,000
 2. 02年3月31日（期末）の資料から1. と同じように繰越利益剰余金を計算する。
 3. 期末貸借対照表を作成する。なお、当期純利益は期末の繰越利益剰余金 ¥170,000 から期首の繰越利益剰余金 ¥100,000 を差し引いて求める。

第3節 収益・費用と損益計算書 P.7

基本問題 P.7

問1

POINT この段階では次のように理解するのがよい。

収益 : ○○益、受取○○

費用 : ○○費、○○料、支払○○

問2・問3

- 〔解答の手順〕
1. 収益を貸方に記入する。
 2. 費用を借方に記入する。
 3. 収益合計>費用合計のとき、借方に「当期純利益」と記入する。
→問2
 4. 収益合計<費用合計のとき、貸方に「当期純損失」と記入する。
→問3

練習問題 P.8

問1

- 〔解答の手順〕
1. 「01年4月1日に現金¥1,000,000を出資して開業した」については、詳しくはテキスト P.75 で学習する。
ここでは、期首と期末の資本金が¥1,000,000であると理解してほしい。
 2. 損益計算書を作成する。
その結果当期純利益が¥280,000となる。
 3. 貸借対照表を作成する。
 - ①資産を借方に記入する。
 - ②負債を貸方に記入する。
 - ③純資産として、「資本金 1,000,000」と繰越利益剰余金を記載する。
なお、繰越利益剰余金の金額は借方と貸方の差額である。

POINT 開業1年目の繰越利益剰余金は損益計算書の当期純利益と等しい。

問2

- 〔解答の手順〕
1. 与えられた資料（勘定）について、資産・負債・純資産・収益・費用に正しく分類できることが大切である。
 2. 貸借対照表の繰越利益剰余金の金額は、借方と貸方の差額で求めてもよいし、開業1年目であるから損益計算書の当期純利益を記入してもよい。
 3. 問題文中の「なお、当期中の追加出資はない」について
期中に資本金の増やす取引はなかったということである。したがって
期末の貸借対照表の資本金は期首と同じ¥1,000,000である。

問 3

- 〔解答の手順〕
1. 資産 - 負債 = 純資産より
 $¥20,000 - ¥4,000 = \textcircled{1}$
 期末純資産 - 期首純資産 = 当期純損益より
 $¥16,000 - ¥15,000 = \textcircled{3}$
 収益 - 費用 = 当期純損益より
 $¥9,000 - \textcircled{2} = ¥1,000$
 2. 期末純資産 - 期首純資産 = 当期純損益より
 $¥7,000 - \textcircled{4} = ¥2,000$
 資産 - 負債 = 純資産より
 $¥18,000 - \textcircled{5} = ¥7,000$
 収益 - 費用 = 当期純損益より
 $\textcircled{6} - ¥6,000 = ¥2,000$
 3. 収益 - 費用 = 当期純損益より
 $¥19,000 - ¥20,000 = \triangle ¥1,000$
 期末純資産 - 期首純資産 = 当期純損益より
 $\textcircled{8} - ¥6,000 = -¥1,000$
 資産 - 負債 = 純資産より
 $\textcircled{7} - ¥7,000 = ¥5,000$

POINT 当期純損失のときは金額に「-」（マイナス）をつけて計算する。

問 4

- (期末) 資産 - (期末) 負債 = (期末) 純資産より
 $¥2,950,000 - ¥800,000 = ¥2,150,000$ 期末純資産 ¥2,150,000
- 期末純資産 - 期首純資産 = 当期純損益より
 $¥2,150,000 - \text{期首純資産} = \text{当期純損益}$ 期首純資産 ¥2,000,000
- (期首) 資産 - (期首) 負債 = (期首) 純資産
 $\text{期首資産} - ¥600,000 = ¥2,000,000$ 期首資産 ¥? (②)
- 収益総額 - 費用総額 = 当期純利益より
 $¥3,555,000 - \text{費用総額} = \text{当期純利益}$ 費用総額 ¥? (①)

第4節 取引と勘定記入／仕訳と転記 P.11

基本問題 P.11

問1

- 4月1日 ・会社にとって現金（資産）が増加する → 資産の増加は借方に記入する
→ (借) 現金
- ・資本金（純資産）が増加する（テキストP.75で学習する）→ 純資産の増加は貸方に記入
→ (貸) 資本金
- 5日 ・備品（資産）が増加する → 資産の増加は借方に記入する
→ (借) 備品
- ・現金（資産）が減少する → 資産の減少は貸方に記入する
→ (貸) 現金
- 12日 ・商品（資産）が増加する → 資産の増加は借方に記入する
→ (借) 商品
- ・「商品を仕入れ代金は掛けとしたとき」は買掛金という負債が増加する
→ 負債の増加は貸方に記入する → (貸) 買掛金
- 17日 ・商品（資産）が減少する → 資産の減少は貸方に記入する
→ (貸) 商品
- ここで商品の減少は原価の¥150,000であることに注意する。
- ・「商品を売り渡し代金は掛けとしたとき」は売掛金という資産が増加する。
→ 資産の増加は借方に記入 → (借) 売掛金
- 25日 給料を支払ったときは、給料という費用が発生する → 費用の発生は借方に記入
→ (借) 給料
- 30日 「売掛金を回収した」というのは、売掛金（資産）が減少したことである。
→ 資産の減少は貸方に記入 → (貸) 売掛金

- POINT** ①問題文に「掛けとした」ということばが出てきたら（12日・17日）
仕入れの掛けなら 買掛金
売り渡し（売上げ）の掛けなら 売掛金 と覚える。
- ②仕訳は会社にとって何が増減または発生するかで考える。

問2

- (1) ・会社にとっては現金と備品が増加することに注意する。
・「出資して」→資本金が増加する。
- (2) 「現金を借り入れたとき」は借入金という負債が増加する。 → 負債の増加は貸方に記入
→ (貸) 借入金
- (3) 初心者は、「金庫が増えるので「(借) 金庫」と仕訳する」ケースが目立つ。
金庫は備品勘定（資産）で処理する。 → (借) 備品
- (7) 「買掛金を支払った」というのは、買掛金（負債）が減少したことである。 → 負債の減少は借方に記入する。
→ (借) 買掛金
- (9) 家賃を支払ったときは、支払家賃という費用で処理する。 → 費用の発生は借方に記入する。
→ (借) 支払家賃

- POINT** 家賃・利息・地代・手数料については、受け取ったり、支払ったりするので、仕訳にあたっては頭に「受取」または「支払」をつける。

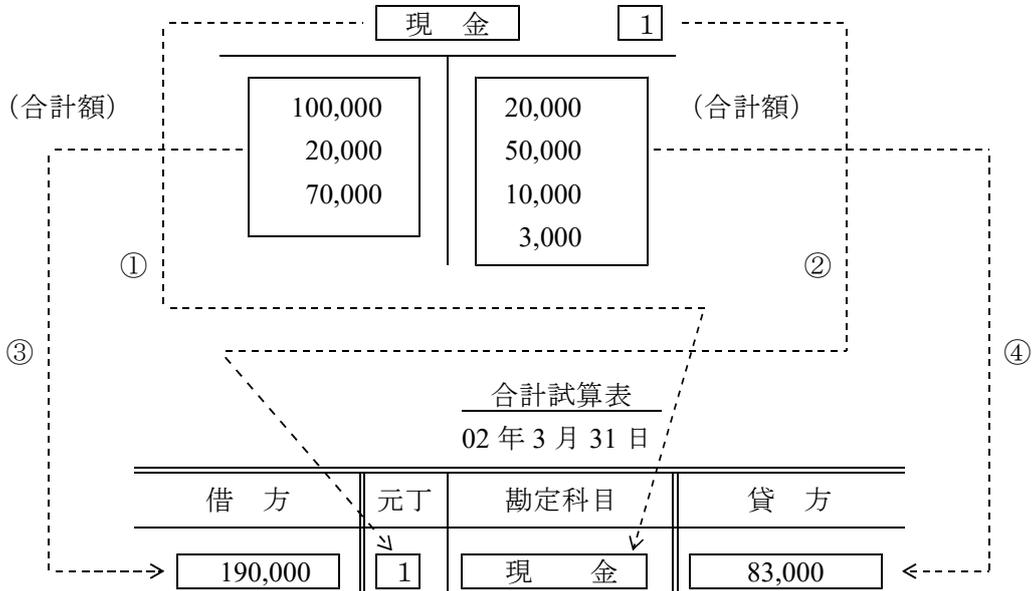
P.13 問3の(2)、問4の20日参照

第5節 試算表 P.16

基本問題 P.16

問1

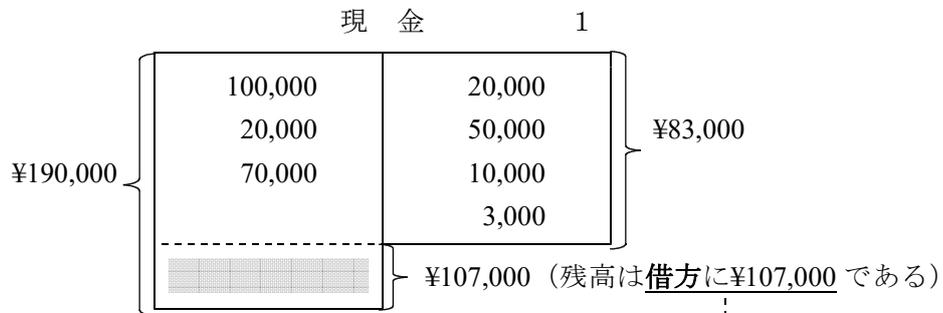
〔解答の手順〕 現金勘定から雑費勘定まで、下記のように①から④の順に記入する。



※最後に借方と貸方の合計額を記入し、それが一致していることを確認する。

問2

〔解答の手順〕 現金勘定から雑費勘定まで、下記のように残高を順に記入する。



借方		元丁	勘定科目	貸方	
107,000		1	現金		

※最後に借方と貸方の合計額を記入し、それが一致していることを確認する。

問 3

〔解答の手順〕 現金勘定から順に、「①合計金額」を記入し、その後「②残高」を記入する。残高は多い方の金額（¥190,000）から少ない方の金額（¥83,000）を差し引いて、多い方の側に記入する。

合計残高試算表
02年3月31日

借 方		元 丁	勘 定 科 目	貸 方	
残 高	合 計			合 計	残 高
107,000	190,000	1	現 金	83,000	
↑ ②	↑ ①			↑ ①	

※最後に合計欄、残高欄ともに借方と貸方の合計額を記入し、それが、それぞれ一致していることを確認する。

練習問題 P.19

問 1 (省略)

問 2

〔解答の手順〕 1. 「(B)6月25日から6月30日までの取引」の仕訳を別紙にて行う。

※ 6/30 の仕訳

「借入金（負債）を支払った」→負債の減少→借方に記入する。

→ (借) 借入金 10,000

「利息とともに…支払った」→支払利息（費用）の発生

→ (借) 支払利息 200

2. 少し狭いが、上記仕訳を「(A)6月24日までの勘定記録」に転記する。

※時間を短縮するために金額だけ転記するとよい。

3. 転記済みの勘定記録をもとに残高試算表を作成する。

第2章 諸取引の記帳 P.21

第1節 現金・預金取引 P.21

基本問題 P.21

問1

- (1) 切手および郵便はがきは通信費（費用）で処理する。→（借）通信費
- (2) ・「売掛金の回収」は、売掛金という債権（資産）の減少である。
→（貸）売掛金
- ・「郵便為替証書」は、簿記では現金として扱う。→（借）現金
- (3) ・「同社振出しの小切手」について
この問題で、同社とは青森商事（株）のことである。このように他人（青森商事）が振り出した小切手を**他人振出しの小切手**といい、簿記では現金として扱う。
- ・「残額は掛けとした」
この場合の掛けは、商品を買ったときの掛けであるから売掛金（資産）で処理する。
→（借）売掛金
- (4) ・「利息を…受け取った」→この利息は受取利息（収益）である。
→（貸）受取利息
- ・「送金小切手」は、簿記では現金として扱う。→（借）現金

POINT	通貨	}	簿記では現金として扱う
	他人振出しの小切手		
	送金小切手		
	郵便為替証書		

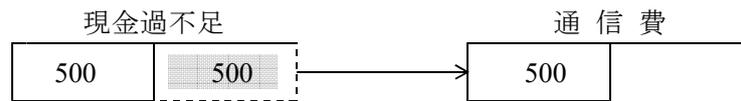
問2

- (1) 仕訳
1/29 売掛金を受け取った→売掛金（資産）の減少 →（貸）売掛金
同社振出しの小切手は現金として処理する。→（借）現金
- (2) 現金出納帳
仕訳に「現金」が出てきたら、現金出納帳（補助簿）に記入する。
- ・（借）現金 ×× → 現金出納帳の収入欄に金額を記入する。
 - ・（貸）現金 ×× → 現金出納帳の支出欄に金額を記入する。
 - ・摘要欄には取引の概要を記入する。
 - ・締切り（朱記）
 - ①日付のほか、摘要欄に「次月繰越」、支出欄に最後の取引後の残高を記入する。
 - ②収入欄と支出欄に単線（単線）を引き合計額を記入する。その後、摘要欄以外の各欄に締切線（二重線）を引く。
 - ・開始記入
日付のほか、摘要欄に「前月繰越」、収入欄と残高欄に前期からの繰越高を記入する。

問3

- (1) ・帳簿上の現金¥18,000 を¥500 減少させると実際有高¥17,500 と等しくなるので、帳簿の現金を¥500 減らす仕訳を行う。→（貸）現金
- ・相手の勘定科目を「現金過不足」とする。→（借）現金過不足
- (2) 過不足の原因がわかったとき、判明した勘定（ここでは通信費（費用））に振り

替える。



※振替がよくわからなかったら、この時点では、原因がわかったという「通信費の発生」と、現金過不足を減らす仕訳をすると覚える。

問 4

- (1) ・帳簿上の現金¥21,000 を¥2,500 増加させると実際有高¥23,500 と等しくなるので、帳簿の現金を¥2,500 増やす仕訳を行う。 → (借) 現金
- ・相手の勘定科目を「現金過不足」とする。 (貸) 現金過不足
- (2) 過不足の原因がわかったとき、判明した勘定（ここでは受取利息（収益））に振り替える。



※振替がよくわからなかったら、「受取利息の発生」と、現金過不足を減らす仕訳をすると覚える。

POINT 現金過不足

帳簿残高を実際有高に修正するためには、現金をいくら増加あるいは減少させるかと考えて仕訳する。

問 5

- 6/1 「現金を当座預金に預け入れた」
 - ・当座預金という資産が増加する。 → (借) 当座預金
 - ・現金を銀行に預けることで、会社の現金が減少する。 → (貸) 現金

※仕訳は会社にとって何が増えたか減ったかである。
- 6/5 「現金を引き出した」
 - ・銀行から現金を引き出したので、会社にとっては現金が増加する。 → (借) 現金
 - ・小切手を振り出すことで当座預金（資産）が減少する。 → (貸) 当座預金
- 6/19 「当座預金口座への振込みを受けた」 → 当座預金口座に振り込まれたということ → 当座預金（資産）が増加する。 → (借) 当座預金
- 6/25 「当座預金口座より引き落とされた」 → 当座預金（資産）が減少する。 → (貸) 当座預金

POINT 当座預金

- 当座預金口座へ振り込まれた → 当座預金の増加
- 当座預金口座より引き落とされた → 当座預金の減少
- 小切手を振り出した → 当座預金の減少

 他人振出しの小切手を受け取った → 現金の増加

問 6

〔解答の手順〕 当座預金出納帳

1. 仕訳に「当座預金」が出てきたら、当座預金出納帳（補助簿）に記入する。
 (借) 当座預金 ×× → 当座預金出納帳の預入欄に金額を記入する。
 (貸) 当座預金 ×× → 当座預金出納帳の引出欄に金額を記入する。
2. 摘要欄には取引の概要を記入する。
3. 締切り（朱記）
 - ①日付、摘要欄に「次月繰越」、引出欄に最後の取引後の残高を記入する。
 - ②預入欄と引出欄に単線（単線）を引き合計額を記入する。その後、摘要欄以外の各欄に締切線（二重線）を引く。
4. 開始記入
 - ①日付のほか、摘要欄に「前月繰越」、預入欄と残高欄に前月からの繰越高を記入する。

問 7

- (1) 預金名（ここでは定期預金）を勘定科目として仕訳する。
- (2) 「利息¥3,000」が受取利息であることに注意する。

問 8

- (1)
 - 6/1 ・ 仕訳を行うのは会計係であることに注意する。

小切手を振り出した	→	(貸) 当座預金
小口現金勘定（資産）の増加	→	(借) 小口現金
 - 30 ・ 会計係は、費用が発生した仕訳を行う

	→	(借) 通信費
		消耗品費
		交通費
 - ・ 小口現金が減少した

	→	(貸) 小口現金
--	---	----------
- 7/1 ・ 定額資金前渡法では、小口現金の減少した額だけ補給する。
 仕訳（金額は異なる）は 6/1 と同じである。
- (2) ・ 費用が発生した仕訳を行う

	→	(借) 通信費
		消耗品費
		交通費
- ・ ただちに小切手を振り出して補給した

	→	(貸) 当座預金
--	---	----------

問 9

〔解答の手順〕 この問題は、用度係が週末に報告し・補給を受ける場合である。

1. 与えられた資料をもとに、小口現金出納帳に記入する。
 ここでは、参考までに 11/12 の取引の記入の仕方を説明する。
 - ①日付欄に日付を書く（上の行も 12 日であるから「〃」^{デイトゥ マーク}）
 でよい。
 - ②摘要欄に取引の概要、ここでは「郵便切手・はがき代」と書く。
 - ③支払欄に支払金額（¥5,800）を書く。
 - ④「郵便切手・はがき代」は通信費にあたるので、内訳欄のなかの
 通信費の欄に支払金額（¥5,800）を記入する。
 - ⑤残高欄に残高（¥25,000 - ¥5,800 = ¥19,200）を記入する。

2. 小口現金出納帳の締切り

- ① 支払欄および内訳欄の合計額を記入する。
- ② 問題に「用度係は毎週末に報告し、補給を受けている」とあるので、「16 本日補給」の受入欄に、支払総額（¥24,600）を記入する。
- ③ 「16 本日補給」の下の行に日付、次週繰越、残高を記入する。
 ※残高は受入欄の合計（¥25,000 + ¥24,600 = ¥49,600）と支払欄の合計（¥24,600）の差額である。
- ④ 受入欄と支払欄に合計線を引き、合計額を記入した後で締切線を引く。締切線は残高欄にも引く。

- ⑤ 開始記入
 受入欄に前週からの繰越額を、日付欄に週の初めの日付を、摘要欄に前週繰越と記入し、残高欄を記入する。

POINT 小口現金出納帳

締切りを間違える学習者が多い。特に「本日補給額」と「次週繰越額」である。しっかりと理解しておこう。

問 1 0

〔解答の手順〕 この問題は、用度係が月曜日に前週の支払額を報告し・補給を受ける場合である。

1. 与えられた資料の記入は P.26 問 9 と同じである。
2. 小口現金出納帳の締切り
 - ① 支払欄および内訳欄の合計額を記入する。
 - ② 合計額を記入した下の行に日付、次週繰越（摘要欄）、次週繰越額を記入する。
 ※次週繰越額は受入欄の合計（¥1,200 + ¥23,800 = ¥25,000）と支払欄の合計（¥24,600）の差額（¥400）である。
 - ③ 受入欄と支払欄に合計線を引き、合計額を記入した後で締切線を引く。締切線は残高欄にも引く。
 - ④ 開始記入（省略）

練習問題 P.28

問 1

- (1) 「同社振出しの小切手」 → 他人振出しの小切手 → 現金として処理する。
- (2) 郵便為替証書 → 現金として扱う。
- (3) 帳簿残高を実際有高に合わせるためには → 現金を¥1,800 減少させればよい。
- (4) 「不足額は消耗品費の記入もれであることが判明」 → 消耗品費を計上する。
- (5) 帳簿残高を実際有高に合わせるためには → 現金を¥2,800 増加させればよい。
- (6) 「過剰額は古紙の売却収入であることがわかったので、雑収入として処理した」
 → 雑収入は収益の勘定 → (貸) 雑収入

③内訳欄

仕入れ商品が2種類以上あるときに小計を記入する。

この問題では仕入商品がA・Bの2種類であるので、それぞれの小計を記入する。

2行目 ¥225,000 (500個×@¥450)

3行目 ¥210,000 (300個×@¥700)

※ 内訳欄に小計を記入するとき、¥記号はつけない。二重線と二重線の間に書かれている数字は金額であるためである。

④金額欄

内訳欄の小計を合算した合計金額を3行目に記入する。

1/6 「(貸) 仕入 14,000」を仕入帳に記入する。

返品は仕入取引の取消しであるので、赤で記入(朱記)する。なお記帳方法は1/5と同じように行う。

1/19 「(借) 仕入 168,000」を仕入帳に記入する。

1/5と同じように記入する。

ここで摘要欄の3行目に「引取費用現金払い」と記入することに注意する。

※ 引取費を仕入帳に記入するのは、それをしないと、仕入勘定と仕入帳の金額が合わないことになるからである。

3. 仕入帳の締切り

- ・ 総仕入高(金額欄の黒字合計)を記入する。
- ・ 仕入戻し高(金額欄の朱記合計)を記入する。
- ・ 純仕入高(総仕入高-仕入戻し高)を記入する。

問4

[解答の手順]

1. 仕訳(省略)
2. 売上帳の記入

- ・ 売上帳は売上取引の明細を記録する補助簿である。
したがって、仕訳に「売上」が出てきたら売上帳に記入することになる。
- ・ 売上帳への記入は仕入帳と同じように行う。
- ・ 発送費は売上帳には記入しない。

問5

商品有高帳

仕訳に「仕入」「売上」が出てきたら、商品有高帳に記入する。

商品有高帳の記入にあたっては次の2点に注意する。

- ①商品の種類ごとに記入する。
- ②すべての欄を原価で記入する(3/7の@¥500、3/17の@¥550は売価である)

商品有高帳

先入先出法

商品 A

(単位：円)

01年	摘要	受入			払出			残高		
		数量	単価	金額	数量	単価	金額	数量	単価	金額
3	1 前月繰越	100	280	28,000				100	280	28,000
	3 仕入れ	300	300	90,000			①	100	280	28,000
								300	300	90,000
	7 売上げ			②	100	280	28,000			
					150	300	45,000	150	300	45,000
	12 仕入れ	400	350	140,000				150	300	45,000
								400	350	140,000
	17 売上げ				150	300	45,000			
					150	350	52,500	250	350	87,500
	31 次月繰越				250	350	87,500			
		800		258,000	800		258,000			
4	1 前月繰越	250	350	87,500				250	350	87,500

〔解答の手順〕

- 3/3 摘要欄には仕入先（商店名）などを記入する。この問題では商店名が不明なので、「仕入れ」と記入する。
 - 受入欄に、数量 300、単価 300、金額 90,000 と記入する。
 - 残高欄（①）を記入する。

3/1 の残高欄の単価（@¥280）と 3/3 に仕入れた商品の単価（@¥300）が異なるので、二段に分けて記入する。
そのさい、先に仕入れた方を上段に、後から仕入れた方を下段に書く。
二段に書いた場合は必ずカッコ（左側のみ）でくくる。
- 3/7 摘要欄には販売先（商店名）などを記入する。この問題では商店名が不明なので、「売上げ」と記入する。
払出欄（②）は、先入先出法により記入する。
先入先出法では、商品の払出しにあたり、先に仕入れた商品（@¥280）が先に売れたと仮定する。
そこで、先に仕入れた@¥280 の商品 100 個すべてを上段に書き、残り 150 個（250 個－100 個）については、後から仕入れた@¥300 の商品が売れたと仮定し下段に記入する。
その結果、3/7 の残高は¥45,000（@¥300 × 150 個（300 個－150 個））となる。
- 3/12 は 3/3、3/17 は 3/7 と同じ考え方で記入する。

[解答の手順]

1. 1/5 (借) 仕 入 46,000 (貸) 買掛金 46,000
静岡

↓

①買掛金勘定へ転記する (説明は省略)

②買掛金元帳の静岡商事に記入する

- ・日付を記入する。
- ・摘要欄には取引の概要 (ここでは「仕入れ」と記入する。
- ・貸方欄に金額を記入する。
- ・借または貸欄に「〃」を記入する。
- ・残高欄を記入する。

1/1 の残高が貸方に¥30,000 であり、今回、同じ貸方に¥46,000 であるから加算し、¥76,000 と記入する。

2. 1/6 (借) 買掛金 5,000 (貸) 仕 入 5,000
静岡

↓

①買掛金勘定へ転記する (説明は省略)

②買掛金元帳の静岡商事に記入する

- ・日付を記入する。
- ・摘要欄に「戻し」と記入する。
- ・借または貸欄に「〃」を記入する。
- ・残高欄を記入する。

1/5 の残高が貸方に¥76,000 であり、今回、反対の借方に ¥5,000 であるから減算し、¥71,000 と記入する。

練習問題 P.40

問 1 (省略)

問 2 (省略)

第4節 手形取引 P.42

基本問題 P.42

問1

9/1 「約束手形を振り出して支払った」

鹿児島商事 約束手形を振り出すと手形債務（支払期日に手形金額を支払う義務）が発生する。→ 支払手形（負債）が増加する。→（貸）支払手形
 沖縄商事 約束手形を受け取ると手形債権（支払期日に手形金額を受け取る権利）が発生する。→ 受取手形（資産）が増加する。
 →（借）受取手形

9/30 「手形金額を支払った」

鹿児島商事 手形債務が減少する → 支払手形（負債）が減少する。
 →（借）支払手形

〃 「手形金額が当座預金に入金された」

沖縄商事 手形債権が減少する → 受取手形（資産）が減少する。
 →（貸）受取手形

問2

- 1/31 ・「かねて横浜商事に振り出していた約束手形」から、かねて（貸）支払手形の仕訳が行われていることがわかる。
 ・「支払期日となり、当座預金口座より引き落とされた」から、（借）支払手形となる。

練習問題 P.43

問1

- (3) 「さきに、… 振り出した約束手形」から、これまでに（貸）支払手形の仕訳が行われていることがわかる。そして、
 「本日満期につき…支払った」ことで、上記支払手形（負債）が減少する。
 →（借）支払手形
- (4) 「かねて取り立てを依頼していた、… 当社受取りの約束手形」から、これまでに（借）受取手形の仕訳が行われていることがわかる。そして、
 「本日満期につき … 当座預金に入金したむね…通知を受けた」ことで、受取手形（資産）が減少する。
 →（貸）受取手形

第5節 その他の債券・債務の取引 P.44

基本問題 P.44

問1

- (1) 現金を貸し付け借用証書を受け取ったときは → (借) 貸付金
- (2) 現金を貸し付け約束手形を受け取ったときは → (借) 手形貸付金
- (3) 利息¥10,000 を差し引き小切手¥490,000 を振り出したので、貸付金の金額は¥500,000 である。
- (4) ・利息¥4,500 を差し引かれ、同社振出しの小切手¥745,500 を受け取ったので、手形借入金の金額は¥750,000 である。
 ・「同社振出しの小切手」は、他人振出しの小切手であるから、現金勘定で処理する。

※問題文に、利息が出てきたら、受取利息か支払利息のいずれかである。

貸し付けたときの利息 → 受取利息 ←(3)

借り入れたときの利息 → 支払利息 ←(4)

問2

- (4) 受取利息の計算

$$¥2,000,000 \times 7.5\% \times 6 \text{ か月} / 12 \text{ か月} = ¥75,000$$

問3

- 11/2 ・古河商事 内金を支払うと、あとで商品を受け取るなどの債権（資産）が発生する。 → (借) 前払金
- ・船橋商事 内金を受け取ると、あとで商品を引き渡すなどの債務（負債）が発生する。 → (貸) 前受金

問4

- (2) ・雑誌・古新聞（商品以外のもの）を売却し、代金を後日受け取る場合、未収金（資産）の増加となる。 → (借) 未収金
- ・貸方は雑収入勘定（収益）で処理する。
- (4) ・備品（商品以外のもの）を買い入れ、代金は月末払いにした場合、未払金（負債）の増加となる。 → (貸) 未払金

※ 商品を掛けて売った (借) 売掛金

商品を掛けて買った (貸) 買掛金

商品以外のものを売って、代金は後日受け取る

(借) 未収金

商品以外のものを買って、代金は後日支払う

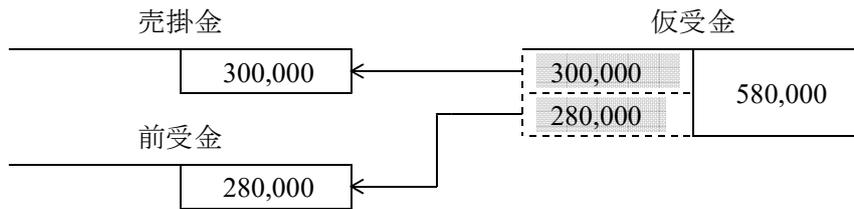
(貸) 未払金

問5

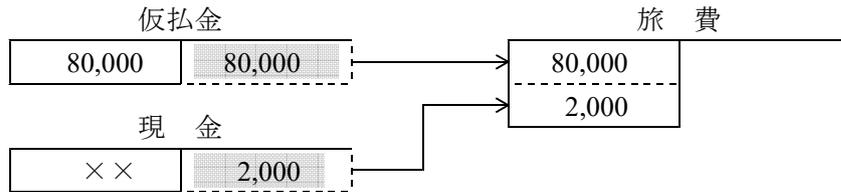
- (1) 従業員に現金を立て替えて支払えば、あとで現金を受け取る債権（資産）が発生する。 → (借) 従業員立替金
- (2) ・「所得税の源泉徴収額を差し引く」というのは、従業員が納付する所得税を企業が預かるということであり、所得税預り金という負債が増加する。
 → (貸) 所得税預り金
- ・「社会保険料を差し引く」も、従業員が納付する社会保険料を企業が預かるということであり、社会保険料預り金という負債が増加する。
 → (貸) 社会保険料預り金

問 6

- (1) 「概算額を支払った」ということは、旅費の金額が確定していないということであり、(借) 旅費××の仕訳ができない。
そこで、金額が確定するまで仮払金勘定 (資産) で処理する。
→ (借) 仮払金
- (2) 「当座振込があったが、その内容は不明である」ということは、借方は当座預金になるが、貸方の勘定科目が判らない。そこで、貸方の勘定科目が判明するまで仮受金勘定 (負債) で処理する。
→ (貸) 仮受金
- (3) 内容が判明したので、仮受金勘定から判明した内容の勘定へ振り替える。



- (4) 従業員が出張から帰り旅費を精算したところ、前もって渡した¥80,000 では足りなかったので、不足分の¥2,000 を現金で渡したという取引である。そこで、仮払金全額を旅費勘定に振り替えるとともに、不足額の¥2,000 は現金勘定から振り替える。



練習問題 P.48

問 1

- (2) 「その利息」は、貸し付けたときの利息であるから、受取利息である。
- (4) 「利息¥3,500」は、借り入れたときの利息であるから、支払利息である。
- (6) 「さきに前払いしてある内金を差し引き」
先に前払いしてある内金は前払金である。
それを差し引きとあるから、前払金 (資産) の減少になる。
→ (貸) 前払金
- (7) 「内金として受け取った」は、前受金 (負債) の増加である。
→ (貸) 前受金
- (16) 「所得税額」を差し引いて → (貸) 所得税預り金
「従業員立替金」(資産) を差し引いて → (貸) 従業員立替金
「社会保険料」を差し引いて → (貸) 社会保険料預り金

第6節 有価証券取引 P.50

基本問題 P.50

問1

- (1) ・「株式」を買い入れたときは有価証券(資産)の増加である。
→ (借) 有価証券
- ・買入手数料は有価証券の買入価額に加算する。
- (2) 株式は商品ではないから、「代金は後日支払うことにした」は未払金(負債)で処理する。
→ (貸) 未払金
- (3) ・「社債」を買い入れたときは有価証券(資産)の増加である。
→ (借) 有価証券
- (4) ・買入価額の計算

$$\text{@¥98.50 (単価)} \times \frac{\text{額面総額¥2,000,000}}{\text{¥100}} \text{ (口数)} + \text{¥25,000 (手数料)}$$

- ・買入手数料は有価証券の買入価額に加算する。

問2

- (1) ・売却による有価証券の減少は¥909,000である。

$$\text{¥2,727,000} \times \frac{\text{1,000 株}}{\text{3,000 株}} = \text{¥909,000}$$

- ・売却代金 1,000株 × @¥915 = ¥915,000

- (2) ・売却代金¥1,280,000 - 帳簿価額¥1,287,000 = -¥7,000 (有価証券売却損)

- ・有価証券売却損は費用である。

- (3) ・売却代金 @¥99.40 (単価) × $\frac{\text{額面総額¥5,000,000}}{\text{¥100}}$ (口数) = ¥4,970,000

- ・売却代金¥4,970,000 - 帳簿価額¥4,950,000 = ¥20,000 (有価証券売却益(収益))

- (4) ・売却代金 @¥99.70 (単価) × $\frac{\text{額面総額¥1,000,000}}{\text{¥100}}$ (口数) = ¥997,000

- ・売却代金¥997,000 - 帳簿価額¥996,500 (¥1,993,000 ÷ 2) = ¥500 (有価証券売却益(収益))

練習問題 P.51

問1 (省略)

第10節 証ひょうと伝票 P.57

基本問題 P.57

問1

- (1) 税抜方式により処理することになっているので、仮払消費税（¥77,500）を計上する。
- (2) ・印刷用紙・プリンターインク・ボールペンは、いずれも消耗品費勘定（費用）で処理する。
・問題文より消費税の処理は行わなくてよい。

問2

- (1) ・領収証は、代金を支払ったときに受け取る証ひょうである。
・「代金はすでに支払い済みであり、仮払金勘定で処理してある」より、代金を支払ったときに次の仕訳がなされていることがわかる。
 (借) 仮払金 2,856,000 (貸) 現金など 2,856,000
・領収証から、代金支払いがパソコンの購入であることがわかったので、仮払金勘定から備品勘定へ振り替える。
・配送料・セッティング作業代は備品の取得原価に加算する。
- (2) ・品物を購入したときの仕訳を行う。
・印刷用紙は消耗品費勘定で、デスクトップパソコンは備品勘定で処理する。

問3

〔解答の手順〕

1. 取引の仕訳を行う

01.1/10 (借) 現金 120,000 (貸) 売掛金 120,000

2. 仕訳の借方が現金である入金取引であるから、入金伝票に起票する。

- ① 科目欄 現金の相手勘定科目（売掛金）を記入する。
- ② 入金先（埼玉商事（株））を記入する。
- ③ 摘要欄に取引の概要（ここでは、売掛金の回収）、金額欄に金額を記入する。
- ④ 合計金額を記入する。

1. 取引の仕訳を行う

01.1/16 (借) 買掛金 270,000 (貸) 支払手形 270,000

2. 仕訳の借方にも貸方にも現金がない振替取引であるから、振替伝票に起票する。

- ① 1行目に仕訳を記入する。
- ② 摘要欄に取引の概要（ここでは、群馬商事（株）買掛金の支払い）を記入する。
- ③ 合計金額を記入する。

1. 取引の仕訳を行う

01.1/23 (借) 仕入 180,000 (貸) 現金 180,000

2. 仕訳の貸方が現金である出金取引であるから、出金伝票に起票する。

- ① 科目欄 現金の相手勘定科目（仕入）を記入する。
- ② 支払先（栃木商事（株））を記入する。
- ③ 摘要欄に取引の概要（ここでは、仕入代金の支払い）、金額欄に金額を記入する。
- ④ 合計金額を記入する。

問 4

各伝票より取引（仕訳）を推定し、勘定に転記する。

入金伝票 No. 12

- ・ 入金伝票である → (借) 現 金
 - ・ 科目欄の「売掛金」が相手の勘定科目である → (貸) 売掛金
- (答) 9/8 (借) 現 金 320,000 (貸) 売 掛 金 320,000

出金伝票 No. 22

- ・ 出金伝票である → (貸) 現金
 - ・ 科目欄の「仕入」が相手の勘定科目である → (借) 仕 入
- (答) 9/14 (借) 仕 入 120,000 (貸) 現 金 120,000

振替伝票 No. 33

- ・ 振替伝票であるから 1 行目がそのまま仕訳となる
- (借) 買掛金 (貸) 支払手形
- (答) 9/23 (借) 買掛金 600,000 (貸) 支払手形 600,000

練習問題 P.62

問 1

- ・ 問題文の「商品¥275,000（消費税¥25,000を含む）」より、
売上が¥250,000、仮受消費税が¥25,000 であることがわかる。
- (貸) 売上 250,000
(貸) 仮受消費税 25,000
- ・ 小切手¥175,000 を受け取った → (借) 現金 175,000
 - ・ 約束手形¥100,000 を受け取った → (借) 受取手形 100,000

問 2

- 8/8 (借) 仮払金 30,000 (貸) 現 金 30,000 → 出金伝票
- 10 (借) 備 品 130,000 (貸) 未 払 金 130,000 → 振替伝票
- 11 (借) 現 金 250,000 (貸) 当座預金 250,000 → 入金伝票

※入金伝票、出金伝票の科目欄に注意！

入金伝票	
01年 月 日	
科 目	金 額
〇〇〇	

(借) 現金×× (貸) 〇〇〇××

出金伝票	
01年 月 日	
科 目	金 額
〇〇〇	

(借) 〇〇〇×× (貸) 現金××

問 3 (省略)

第3章 決算 P.66

第1節 決算整理 P.66

基本問題

問1

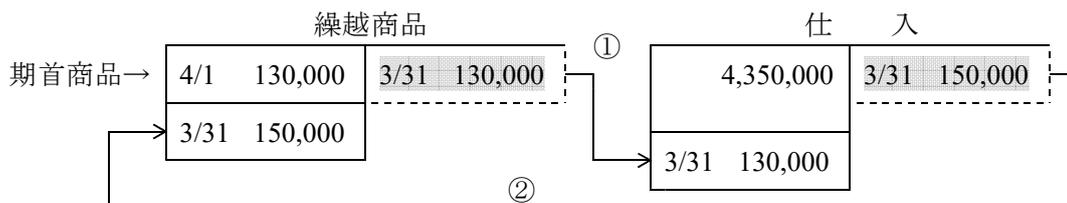
(1) ・売上原価を計算するための決算整理仕訳は、その手順をしっかりと理解しておこう。

①期首商品棚卸高を仕入勘定に振り替える。

②期末商品棚卸高を仕入勘定から繰越商品勘定へ振り替える。

・期首商品棚卸高は繰越商品勘定の前期繰越高である。

・期末商品棚卸高は問題文に提示される。



(2) 仕入勘定の残高が売上原価である。

問2 (省略)

問3

[解答の手順]

$$1. \quad \begin{array}{r} \text{売上原価} = \text{期首商品棚卸高} + \text{純仕入高} - \text{期末商品棚卸高} \\ \text{(ア)} \quad \quad \quad 860,000 \quad \quad 6,420,000 \quad \quad 880,000 \end{array}$$

$$\begin{array}{r} \text{売上総利益} = \text{純売上高} - \text{売上原価} \\ 1,280,000 \quad \quad \text{(イ)} \quad \quad \text{(ア)} \end{array}$$

$$\begin{array}{r} \text{純売上高} = 1,280,000 + \text{(ア)} \\ \text{(イ)} \end{array}$$

$$2. \quad \begin{array}{r} \text{売上原価} = \text{期首商品棚卸高} + \text{純仕入高} - \text{期末商品棚卸高} \\ 5,400,000 \quad \quad 930,000 \quad \quad \text{(ウ)} \quad \quad 970,000 \end{array}$$

$$\begin{array}{r} \text{純仕入高} = 5,400,000 - 930,000 + 970,000 \\ \text{(ウ)} \end{array}$$

$$\begin{array}{r} \text{売上総利益} = \text{純売上高} - \text{売上原価} \\ \text{(エ)} \quad \quad 6,480,000 \quad 5,400,000 \end{array}$$

問4

$$\begin{array}{r} \text{貸倒見積額} \quad \quad \text{売掛金残高} \times 2\% = \text{¥3,600} \\ \quad \quad \quad \quad \quad 180,000 \quad \quad 0.02 \end{array}$$

$$\begin{array}{r} \text{貸倒引当金繰入額} \quad \quad \text{貸倒見積額} - \text{貸倒引当金残高} = \text{¥1,100} \\ \quad \quad \quad \quad \quad 3,600 \quad \quad 2,500 \end{array}$$

問5

$$\begin{array}{r} \text{貸倒見積額} \quad \quad (\text{受取手形} + \text{売掛金}) \times 2\% = \text{¥2,900} \\ \quad \quad \quad \quad \quad 65,000 \quad \quad 80,000 \quad \quad 0.02 \end{array}$$

$$\begin{array}{r} \text{貸倒引当金繰入額} \quad \quad \text{貸倒見積額} - \text{貸倒引当金残高} = \text{¥2,000} \\ \quad \quad \quad \quad \quad 2,900 \quad \quad 900 \end{array}$$

問 6 (省略)

問 7

- (ア) 貸倒れになった前期の売掛金 < 引当金の残高
→ (借) 貸倒引当金
- (イ) 貸倒れになった前期の売掛金 > 引当金の残高
→ (借) 貸倒引当金
貸倒損失 (不足額)

問 8

- (1) 貸倒引当金を取り崩すことができるのは、前期の売掛金が貸倒れになったときである。
- (2) 当期に発生した売掛金が当期に貸倒れになったときは、貸倒引当金を取り崩すことはできない。

問 9 減価償却費の計算 (残存価額がゼロ)

$$\text{減価償却費} = \frac{\text{取得原価}}{\text{耐用年数}} = \frac{¥1,000,000}{10 \text{ 年}}$$

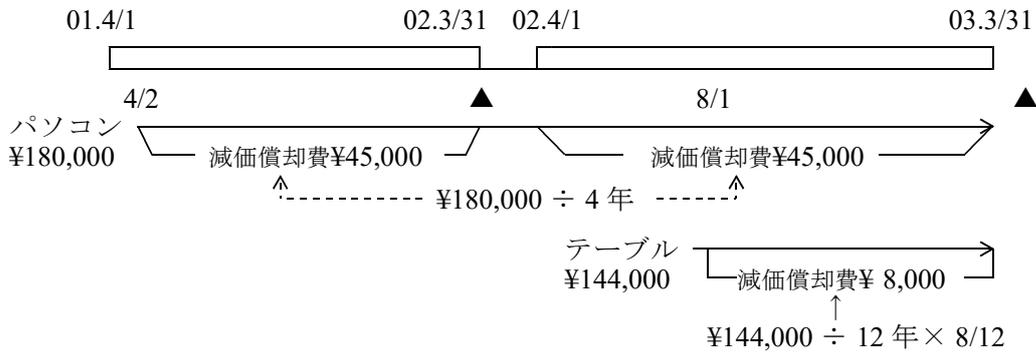
問 10

$$\text{減価償却費} = \frac{\text{取得原価}}{\text{耐用年数}} \times \frac{9 \text{ か月 (7月～翌3月)}}{12 \text{ か月}} = \frac{¥800,000}{5 \text{ 年}} \times \frac{9}{12}$$

減価償却費は使用した期間について月割りで計算する。

問 11 減価償却費 (建物) ¥200,000 ÷ 20 年 / (備品) ¥60,000 ÷ 6 年

問 12



・パソコン

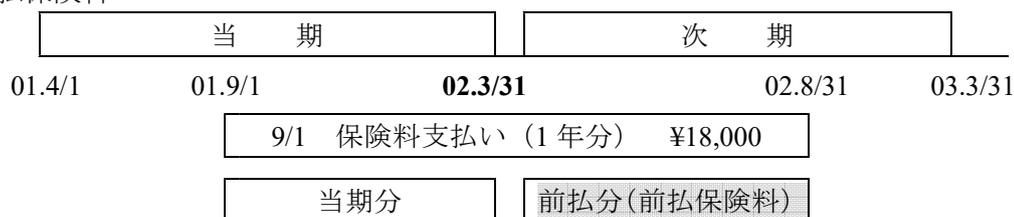
$$\begin{aligned} \text{期首帳簿価額} & ¥180,000 - ¥45,000 \\ \text{当期減価償却費} & ¥180,000 \div 4 \text{ 年} \\ \text{期末帳簿価額} & ¥135,000 - ¥45,000 \end{aligned}$$

・テーブル

$$\begin{aligned} \text{期首帳簿価額} & \text{ゼロ} \\ \text{当期減価償却} & ¥144,000 \div 12 \text{ 年} \times \frac{8 \text{ か月 (8月～3月)}}{12 \text{ か月}} \\ \text{期末帳簿価額} & ¥144,000 - ¥8,000 \end{aligned}$$

問 1 3

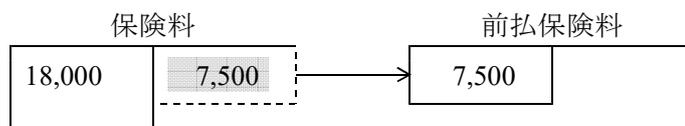
前払保険料



・前払保険料

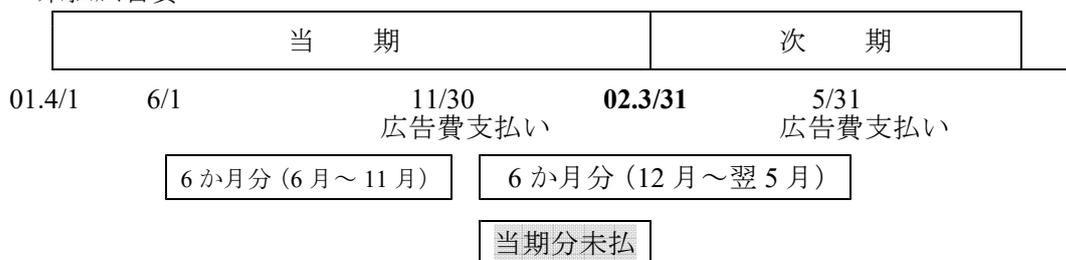
$$¥18,000 \times \frac{5 \text{ か月 (4 月～8 月)}}{12 \text{ か月}}$$

・保険料勘定から前払分を前払保険料勘定（資産）に振り替える。



問 1 4

未払広告費



・未払広告費

$$¥600,000 \times \frac{4 \text{ か月 (12 月～翌 3 月)}}{12 \text{ か月}}$$

・広告費勘定（費用）の借方と未払広告費勘定（負債）の貸方に記入する。

問 1 5

現金過不足勘定の借方に記入されているということは、現金不足を表しているので、決算日において雑損勘定（費用）に振り替える。

問 1 6

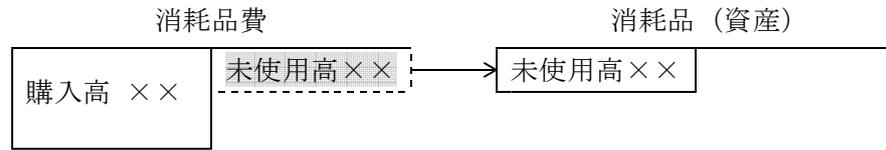
現金過不足勘定の貸方に記入されているということは、現金過剰を表しているので、決算日において雑益勘定（収益）に振り替える。

問 1 7

- ・決算日において現金の過不足が判明したときは、直接、雑損勘定または雑益勘定で処理する。
- ・¥25,000 が帳簿残高、¥25,500 が実際有高である。
現金過剰であるから、現金過不足勘定は設けずに雑益勘定で処理する。

問 18

消耗品を購入したときは消耗品費勘定（費用）で処理し、決算日に未使用分を資産の勘定である消耗品勘定に振り替える。



第2節 精算表 P.72

基本問題 P.72

問1 (2)

精算表

02年3月31日

勘定科目	残高試算表		整理記入		損益計算書		貸借対照表	
	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方
現金過不足	200			200			②	
繰越商品	57,000		45,000	57,000			③ 45,000	
繰越利益剰余金								
① 売上								
当期純()								

④メモ書き → 545,000 560,500 289,000 273,500

⑤差額 → 15,500 15,500

※慣れるまで次のように解いていくのもよい。

1. 決算整理仕訳を整理記入欄に書き移す。なお、新しく出てきた勘定科目は勘定科目欄に追記する。
2. 売上の上（つまり繰越利益剰余金と売上の間）に、勘定科目から貸借対照表まで横線を引く。(①)

※あくまでもメモ的に引くものであり、検定においては消さなくてもよい。

3. 残高試算表の金額に整理記入欄の金額を加算・減算し、貸借対照表欄および損益計算書欄に書き移す。

加算・減算にあたっては、同じ側にある金額は加算し、反対側にある金額は減算する。

〈例〉・現金過不足

残高試算表の200は借方にあり、整理記入欄の200は貸方にあるので減算する。なお、0の場合は記入しない。(②)

・繰越商品

残高試算表の57,000は借方にあるので、同じ借方の45,000を加算し、反対側の57,000を減算する。(③)

なお、残高試算表の借方にあった金額は、書き移した先でも借方に、残高試算表の貸方にあった金額は、書き移した先でも貸方に記入する。

4. 欄外に損益計算書欄と貸借対照表欄の借方および貸方合計をメモ書きする。(④)
5. それぞれの差額をメモ書きする。(⑤)
6. 求めた差額が一致することを確認する。もし一致しないときはどこかに間違いがあるので、再度見直す。

7. 当期純（ ）の行の記入
- ・損益計算書の借方・貸方の合計額（メモ書き）の少ない側（ここでは借方）に差額の15,500を記入する。
 - ・貸借対照表の借方・貸方の合計額（メモ書き）の少ない側（ここでは貸方）に差額の15,500を記入する。
8. この問題のように、損益計算書の借方と貸借対照表の貸方に差額を記入したときは、当期純（ ）の（ ）に「利益」と記入する。
9. 最終行に各欄の合計額を記入する。

問2

決算整理仕訳

1. (借) 仕 入 840,000 (貸) 繰越商品 840,000
←期首商品棚卸高(残高試算表の繰越商品)
 (借) 繰越商品 880,000 (貸) 仕 入 880,000
←期末商品棚卸高(問題文に提示)
2. (借) 貸倒引当金繰入 15,000 (貸) 貸倒引当金 15,000
－費用－ －売掛金の評価勘定－

$$\text{貸倒引当金繰入高} = \frac{\text{売掛金}}{\text{貸倒引当金}} \times 2\% = \frac{1,000,000}{5,000} \times 2\% = 4\%$$
3. (借) 減価償却費 75,000 (貸) 備 品 75,000
－費用－

$$\text{減価償却費} = \frac{450,000}{6 \text{年}} = 75,000$$
4. (借) 現金過不足 20,000 (貸) 雑 益 20,000
5. (借) 前払保険料 58,000 (貸) 保 険 料 58,000
－資産－
6. (借) 広 告 費 67,000 (貸) 未払広告費 67,000
－負債－
7. (借) 消 耗 品 39,000 (貸) 消 耗 品 費 39,000
－資産－

練習問題 P.76

問1

決算整理仕訳

1. (借) 仕 入 970,000 (貸) 繰越商品 970,000
 (借) 繰越商品 1,210,000 (貸) 仕 入 1,210,000
2. (借) 貸倒引当金繰入 20,000 (貸) 貸倒引当金 20,000
売掛金 貸倒引当金

$$\text{貸倒引当金繰入高} = \frac{2,700,000}{5,000} \times 2\% = 10.8\%$$
3. (借) 減価償却費 250,000 (貸) 備 品 250,000
－費用－

$$\text{減価償却費} = \frac{1,500,000}{6 \text{年}} = 250,000$$
4. (借) 現金過不足 12,000 (貸) 雑 益 12,000
5. (借) 消 耗 品 40,000 (貸) 消 耗 品 費 40,000
6. (借) 給 料 120,000 (貸) 未払給料 120,000
－負債－
7. (借) 前払家賃 200,000 (貸) 支払家賃 200,000
－資産－

問 2

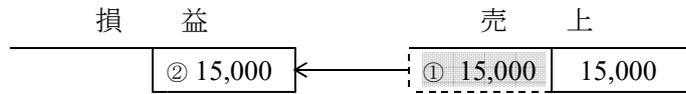
決算整理仕訳

1. (借) 仕 入	880,000	(貸) 繰 越 商 品	880,000
(借) 繰 越 商 品	990,000	(貸) 仕 入	990,000
2. (借) 貸倒引当金繰入	28,000	(貸) 貸 倒 引 当 金	28,000
3. (借) 減 価 償 却 費	200,000	(貸) 備 品	200,000
4. (借) 雑 損	3,600	(貸) 現 金 過 不 足	3,600
5. (借) 消 耗 品	28,000	(貸) 消 耗 品 費	28,000
6. (借) 給 料	150,000	(貸) 未 払 給 料	150,000
7. (借) 前 払 家 賃	140,000	(貸) 支 払 家 賃	140,000

第3節 帳簿の締切り（帳簿決算） P.80

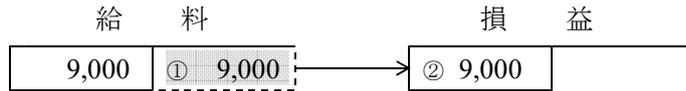
基本問題 P.80

問1



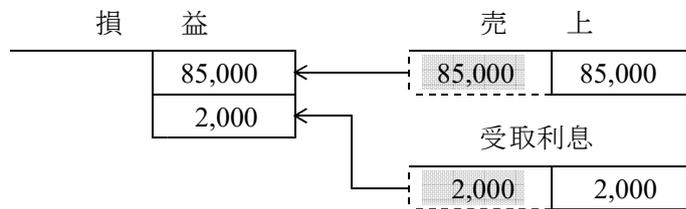
- ①売上勘定の借方に¥15,000 記入する。これで売上勘定の残高がゼロになる。
- ②損益勘定の貸方に¥15,000 記入する。

問2



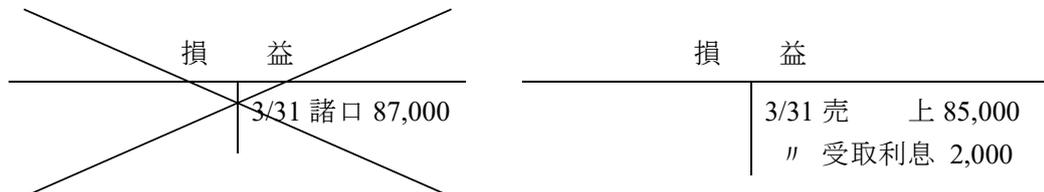
- ①給料勘定の貸方に¥9,000 記入する。これで給料勘定の残高がゼロになる。
- ②損益勘定の借方に 9,000 記入する。

問3

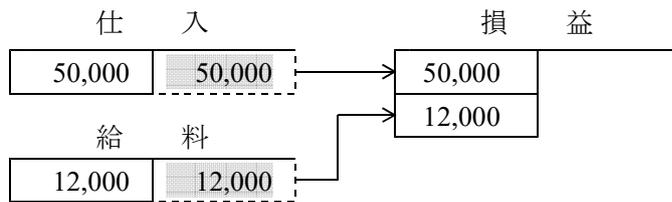


※損益勘定の転記に注意！！

相手の勘定科目が複数するとき、損益勘定への転記にかぎり「諸口」とせずに、相手勘定科目と金額を一つずつ記入する。



問4



② (借) 貸倒引当金繰入 30,900 (貸) 貸倒引当金 30,900

貸倒引当金繰入高 $\frac{\text{売掛金}}{\text{貸倒引当金}} \times 2\% - ¥58,500 = ¥30,900$

③ (借) 減価償却費 350,000 (貸) 備品 350,000

減価償却費 $\frac{\text{取得原価}}{\text{耐用年数}} = ¥2,800,000 \div 8 \text{年} = ¥350,000$

※元帳勘定残高の備品 2,100,000 は、これまでに行われた減価償却費が差し引かれた金額であり取得原価ではない。

減価償却費は取得原価 (¥2,800,000) を耐用年数で除して計算する。

④ (借) 現金過不足 2,850 (貸) 雑益 2,850

・帳簿残高は元帳勘定残高の「現金¥910,250」である。

・これを、実際有高の¥913,100 に合わせるためには、¥2,850 だけ現金を増やす仕訳を行う。 → (借) 現金 2,850

・決算日に過不足が判明したので、貸方は雑益 (収益) とする。

→ (貸) 雑益 2,850

3. 損益計算書と貸借対照表を作成する。

そのさい各項目の金額は、元帳勘定残高の金額に決算整理仕訳の金額を加減して求める。以下に例を示す。

・売上原価 仕入勘定の残高である。

元帳残高 (仕入) 上記 2.①借方 上記 2.①貸方
 $¥18,250,000 + ¥1,319,400 - ¥1,442,300 = ¥18,127,100$

・貸倒引当金 売掛金から控除する形式で記入する。

売掛金	4,470,000		
貸倒引当金	89,400 (ア)		4,380,600 (イ)

元帳残高 上記 2.②
 (ア) $¥58,500 + ¥30,900 = ¥89,400$

(イ) $¥4,470,000 - ¥89,400 = ¥4,380,600$

・商品 期末商品棚卸高の金額である。

・備品

元帳残高 上記 2.③
 $¥2,100,000 - ¥350,000 = ¥1,750,000$

・繰越利益剰余金 (資本金の次に記入する)

元帳勘定残高の¥653,200 は前期繰越高である。

期末貸借対照表の繰越利益剰余金は次のように求める。

元帳勘定残高の繰越利益剰余金 当期純利益 (損益計算書)
 $¥653,200 + ¥1,928,950 = ¥2,582,150$

または、貸借対照表の貸借差額として求める。

練習問題 P.86

問 1

[解答の手順]

1. 決算整理仕訳

- a. (借) 仕 入 1,340,000 (貸) 繰 越 商 品 1,340,000
 (借) 繰 越 商 品 1,250,000 (貸) 仕 入 1,250,000
 b. (借) 貸倒引当金繰入 75,500 (貸) 貸 倒 引 当 金 75,500
 貸倒引当金繰入高

$$\begin{array}{r} \text{受取手形} \quad \text{売掛金} \quad \text{貸倒引当金} \\ (\text{¥}850,000 + \text{¥}2,300,000) \times 5\% - \text{¥}82,000 = \text{¥}75,500 \end{array}$$

$$\text{受取手形 } \text{¥}1,467,000 - \text{¥}617,000 = \text{¥}850,000$$

$$\text{売掛金 } \text{¥}7,086,000 - \text{¥}4,786,000 = \text{¥}2,300,000$$

- c. (借) 減 価 償 却 費 100,000 (貸) 備 品 100,000

- d. (借) 前 払 保 険 料 12,000 (貸) 保 険 料 12,000

$$\text{前払保険料 } \text{¥}48,000 \times \frac{3 \text{ か月 (4月～6月)}}{12 \text{ か月}} = \text{¥}12,000$$

- e. (借) 支 払 家 賃 35,000 (貸) 未 払 家 賃 35,000

2. 損益計算書と貸借対照表の作成

- ・売上原価 仕入勘定の残高である。

$$\begin{array}{r} \text{元帳残高 (仕入)} \quad \text{上記 a 借方} \quad \text{上記 a 貸方} \\ (\text{¥}6,490,000 - \text{¥}212,000) + \text{¥}1,340,000 - \text{¥}1,250,000 = \text{¥}6,368,000 \end{array}$$

- ・貸倒引当金 売掛金から控除する形式で記入する。

受取手形	850,000 (ア)			
貸倒引当金	42,500 (イ)		807,500	
売掛金	2,300,000			
貸倒引当金	115,000 (ウ)		2,185,000	

元帳残高(受取手形)

(ア) $\text{¥}1,467,000 - \text{¥}617,000 = \text{¥}850,000$

(イ) $\text{¥}850,000 \times 5\% = \text{¥}42,500$

(ウ) $\text{¥}2,300,000 \times 5\% = \text{¥}115,000$

第4章 応用 P.88

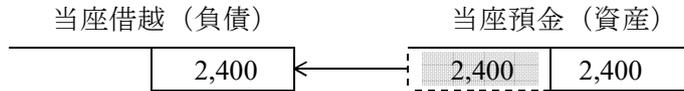
1 現金・預金取引 P.88

問1 6/10 同社振出しの小切手 → 他人振出しの小切手 → 現金として扱う

17 当社振出しの小切手を受け取った → 当座預金の増加

問2

(1)



※当座預金勘定の貸方残高は、当座借越額（銀行からの借金）を表している
ので、決算のときに当座借越勘定（負債）に振り替える。

(2) 仕訳(解答編参照)

当座預金出納帳

残高欄の記入について

- ・ 6/13 6/1 の残高が借方に¥210,000 であり
6/13 は貸方に¥250,000 であるから、
残高は (貸) 40,000 となる。

6/1 210,000	6/13 250,00
(貸) 40,000	

- ・ 6/20 6/13 の残高が貸方に¥40,000 であり、
6/20 に貸方に¥25,000 であるから、
残高は (貸) 65,000 となる。

	40,000
(貸) 65,000	20 25,000

- ・ 6/25 6/20 の残高が貸方に¥65,000 であり、
6/25 の借方に¥300,000 であるから、
残高は (借) 235,000 となる。

6/25	65,000
300,000	(借) 235,000

問3

- ・ 「口座の種別と銀行名を組み合わせた勘定科目で処理」
- ・ 口座の種別 普通預金・当座預金など
銀行名 池袋銀行・豊島信用金庫

2 商品売買取引 P.90

問 1

商品有高帳

商品有高帳

移動平均法

商品 C

(単位：円)

01年	摘要	受 入			払 出			残 高		
		数量	単価	金額	数量	単価	金額	数量	単価	金額
7	1 前月繰越	200	300	60,000				200	300	60,000
	3 売 上 げ				120	300	36,000	80	300	24,000
	7 売上戻り	20	300	6,000				100	300	30,000
	10 仕 入 れ	300	308	92,400				400	306	122,400
	23 売 上 げ				360	306	110,160	40	306	12,240
	31 次月繰越				40	306	12,240			
		520		158,400	520		158,400			
8	1 前月繰越	40	306	12,240				40	306	12,240

7/10 残高欄の単価について

残高欄の単価 (7/7 残高欄の単価@¥300) と異なる単価 (7/10 受入欄の単価@¥308) の商品を仕入れたときの残高欄の単価は、次のように求める。

$$\frac{\begin{array}{l} 7/7 \text{ 残高欄の金額} \\ \text{¥30,000} \end{array} + \begin{array}{l} 7/10 \text{ 受入欄の金額} \\ \text{¥92,400} \end{array}}{\begin{array}{l} 100 \text{ 個} + 300 \text{ 個} \\ 7/7 \text{ 残高欄の数量} \quad 7/10 \text{ 受入欄の数量} \end{array}} = \text{¥306}$$

3 掛け取引 P.91

問 1 ・クレジット払いで商品を売り渡したときは、一般の掛け売上と区別し、クレジット売掛金勘定 (資産) で処理する。

- ・クレジットに支払う手数料は支払手数料勘定 (費用) で処理する。
- ・売上高から上記の支払手数料を差し引いた金額がクレジット売掛金になる。

4 手形取引 P.92

問 1

(1) 前橋商事

買掛金について電子記録債務の発生記録の請求をした

→ 買掛金勘定から電子記録債務勘定（負債）へ振り替える。

→ (借) 買掛金 (貸) 電子記録債務

高崎商事

上記について発生記録の通知を受けた

→ 売掛金勘定から電子記録債権勘定（資産）へ振り替える。

→ (借) 電子記録債権 (貸) 売掛金

(2) 太田商事

売掛金について電子記録債権の発生記録の請求をした

→ 売掛金勘定から電子記録債権勘定へ振り替える。

→ (借) 電子記録債権 (貸) 売掛金

桐生商事

上記について発生記録の通知を受けた

→ 買掛金勘定から電子記録債務勘定へ振り替える。

→ (借) 買掛金 (貸) 電子記録債務

問 2

受取手形記入帳

・受取手形勘定の補助簿である。

・仕訳に「受取手形」が出てきたら受取手形記入帳に記入する。

〈 仕訳 〉

〈 受取手形記入帳 〉

(借) 受取手形×× → 日付から支払場所まで記入

(貸) 受取手形×× → てん末欄に記入

5 その他の債権・債務の取引 P.94

- 問1 ・役員から現金を借り入れたときは、役員借入金勘定（負債）で処理する。
- 問2 法定福利費
- ・「従業員から預かった社会保険料」は社会保険料預り金勘定（負債）に記入されているので、納付したときは（借）社会保険料預り金となる。
→（借）社会保険料預り金
 - ・「社会保険料の会社負担額」を納付したときは、法定福利費勘定（費用）で処理する。
→（借）法定福利費
- 所得税
- ・企業は、従業員が納める所得税を給料日に預かり、後日一括納付する。
8/5 は、従業員から預かった所得税を税務署に納付した取引である。したがって、所得税預り金（負債）の減少となる。 →（借）所得税預り金
- 問3 ・電子マネーに現金をチャージしたときは仮払金勘定で処理する。
・電子マネーで支払をしたときは、仮払金勘定から該当する勘定へ振り替える。
- 問4 受取商品券
- ・他店や地元商工会議所等が発行した商品券を受け取ったときは、受取商品券勘定（資産）で処理する。
- 問5 差入保証金
- ・不動産の賃貸借契約を結ぶにあたり敷金を払ったときは、差入保証金勘定（資産）で処理する。
 - ・仲介手数料は支払手数料勘定で、家賃は支払家賃勘定で処理する。

9 決算整理 P.100

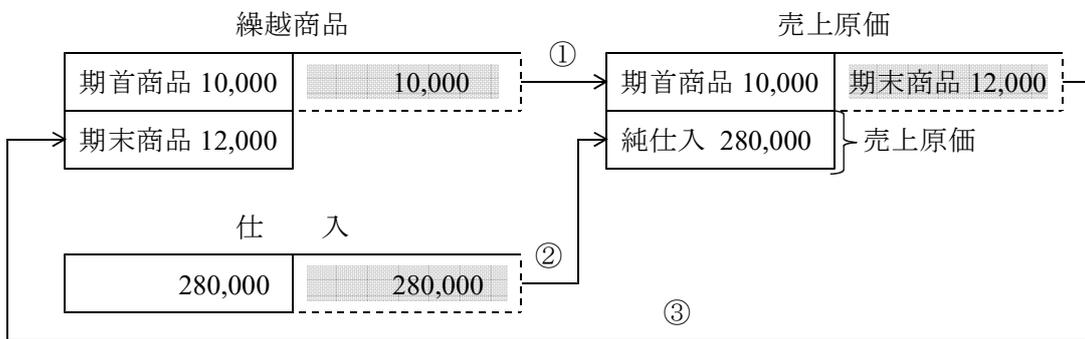
問 1

売上原価を売上原価勘定で計算するには、売上原価勘定で売上原価を計算する式を組み立てる。

売上原価＝期首商品棚卸高＋純仕入高－期末商品棚卸高
 期首商品棚卸高…繰越商品勘定の残高
 純仕入高 …仕入勘定の残高
 期末商品棚卸高…実地棚卸で求める（問題に提示される）。

決算整理仕訳

- ①期首商品棚卸高を繰越商品勘定から売上原価勘定に振り替える。
- ②純仕入高を仕入勘定から売上原価勘定に振り替える。
- ③期末商品棚卸高を売上原価勘定から繰越商品勘定へ振り替える。



問 2～問 7（省略）

問 8 ・決算において当座預金勘定の貸方残高は、当座借越勘定（負債）へ振り替える。

問 9 ・決算において、収入印紙（租税公課で記帳）と切手（通信費で記帳）の未使用高は、貯蔵品勘定（資産）へ振り替える。

・上記仕訳については、決算日の翌日の日付で再振替仕訳を行う。

問 1 0（省略）

問 1 1

〔解答の手順〕

A. (2)の決算整理事項より決算整理仕訳を行う（解答編の解説参照）。

B. 決算整理後残高試算表を作成する。

決算整理前残高試算表の残高に、決算整理仕訳の金額を加減し、決算整理後残高試算表を作成する。

〈例〉繰越商品

整理前残高試算表	(2)2. 貸方	(2)2. 借方	整理後残高試算表
¥336,000	－ ¥336,000	＋ ¥360,000	＝ ¥360,000

貸倒引当金

整理前残高試算表	(2)3.	整理後残高試算表
¥2,800	＋ ¥19,200	＝ ¥22,000

第5章 発展 P.106

1 仕訳問題 P.106

問1 現金・預金取引

1-1 預金額 $\$1,500 \times \yen108 = \yen162,000$ → (借) 外貨預金

1-2 受け取る現金(引出額) $\$500 \times \yen110 = \yen55,000$

引き出したドル預金の帳簿価額 $\$500 \times \yen108 = \yen54,000$

引出額 $\yen55,000$ - 帳簿価額 $\yen54,000$ = 為替差益 $\yen1,000$

→ (借) 現金 (貸) 外貨預金
為替差益

2. 決算日に、外貨預金は決算日の為替レートで換算替えする。

決算日の換算額 帳簿価額 為替差益
($\$20,000 \times \yen115$) - $\yen2,200,000$ = $\yen100,000$

→ (借) 外貨預金 (貸) 為替差益

3. 決算日の換算額 帳簿価額 為替差損
($\$3,500 \times \yen108$) - $\yen385,000$ = $-\yen7,000$

→ (借) 為替差損 (貸) 外貨預金

問2 商品売買取引

値引は売上、仕入の取消し(売り上げたときや仕入れた時の反対仕訳)である。

問3 手形取引

1. 約束手形を裏書譲渡した→手形債権(受取手形)が減少する。

→ (貸) 受取手形

2. 手形を割り引いたときの仕訳はパターンで覚えよう。

→ (借) 当座預金 (貸) 受取手形
手形売却損

3. 手形の更改の問題である。

「振り出した約束手形について、…新しい手形を振り出し旧手形と交換した」

・新しい手形を振り出し → (貸) 支払手形

・旧手形(支払手形で記帳)と交換 → (借) 支払手形

4. 「所有の約束手形について、…新しい手形を受け取り旧手形と交換した。

・新しい手形を受け取り → (借) 受取手形

・旧手形と交換 → (貸) 受取手形

5. 手持ちの「約束手形(受取手形で記帳)が不渡りになった」ときは、受取手形勘定から不渡手形勘定(資産)に振り替える。

→ (借) 不渡手形 (貸) 受取手形

・償還請求に要した費用は不渡手形に加算する。

6. 前期に発生した不渡手形が回収不能になったときは、貸倒引当金を取り崩す。

→ (借) 貸倒引当金 (貸) 不渡手形
貸倒損失

7. 商品以外の物を購入し約束手形を振り出したときは、支払手形勘定で処理しない。

→ (貸) 営業外支払手形

8. 売却時点における、備品に関する勘定記入

備 品		備品減価償却累計額	
01.4/1	600,000		300,000 ※

※ 減価償却累計額 $\text{¥}600,000 \div 8 \text{年} \times 4 \text{回 (決算の回数)} = \text{¥}300,000$

[仕訳の手順]

① 備品に関する勘定をゼロにする → (借) 備品減価償却累計額
(貸) 備品

② 代金の受取り → (借) 営業外受取手形

③ 固定資産売却損益

売却価額 備品の帳簿価額 固定資産売却益
 $\text{¥}400,000 - (\text{¥}600,000 - \text{¥}300,000) = \text{¥}100,000$

→ (貸) 固定資産売却益

問4 有価証券取引

1. 決算日において、売買目的有価証券は時価で評価する。

時価 取得価額 有価証券運用損益
 $\text{¥}21,600 - \text{¥}20,000 = \text{¥}1,600$

取得価額より時価が $\text{¥}1,600$ 大きいので、売買目的有価証券(資産)の帳簿価額を時価に合わせる。 → (借) 売買目的有価証券

2. 時価 取得価額 有価証券運用損益
 $\text{¥}19,700 - \text{¥}20,000 = -\text{¥}300$

→ (貸) 売買目的有価証券

問5 有形固定資産取引

1. 倉庫の建設代金の一部を支払った。 → (借) 建設仮勘定

2. 倉庫が完成した。 → (借) 建物

(貸) 建設仮勘定

3. 賃貸目的で建物を取得したときは、投資不動産勘定で処理する。

→ (借) 投資不動産

商品以外の物を購入し約束手形を振り出した → (貸) 営業外支払手形

問6 株式会社の資本取引

1. 払込金 $2,000 \text{株} \times \text{¥}45,000 = \text{¥}90,000,000$

「払込金のうち1株につき $\text{¥}20,000$ は資本金として計上しない」ことから、
 $2,000 \text{株} \times (\text{¥}45,000 - \text{¥}20,000) = \text{¥}50,000,000$

→ (貸) 資本金

$2,000 \text{株} \times \text{¥}20,000 = \text{¥}40,000,000$

→ (貸) 資本準備金

「会社設立のための諸費用」は、創立費勘定(費用)で処理する。

→ (借) 創立費

2. 「新規設備投資のため」から、増資(開業後の株式の発行)であることがわかる。

→ (貸) 資本金

「資本金組入額は会社法規定の最低限」から、払込金額の1/2が資本金、1/2が資本準備金となる。

開業後の株式の発行に要する諸費用は株式交付費勘定(費用)で処理する。

→ (借) 株式交付費

3. 設立後、開業までにかかった諸費用は開業費勘定(費用)で処理する。

→ (借) 開業費

問7 決算整理

1. @¥150	商品評価損	棚卸減耗費
@¥145		
	290 個	300 個

決算整理仕訳

(借) 仕 入 ×× (貸) 繰越商品 ××
 (借) 繰越商品 ×× (貸) 仕 入 ×× ←@¥150 × 300 個
 (借) 棚卸減耗費 ×× (貸) 繰越商品 ×× ← (300 個 - 290 個) × @¥150
 (借) 商品評価損 ×× { (@¥150 - @¥145) × 290 個
 が答えである

2. ~ 4.

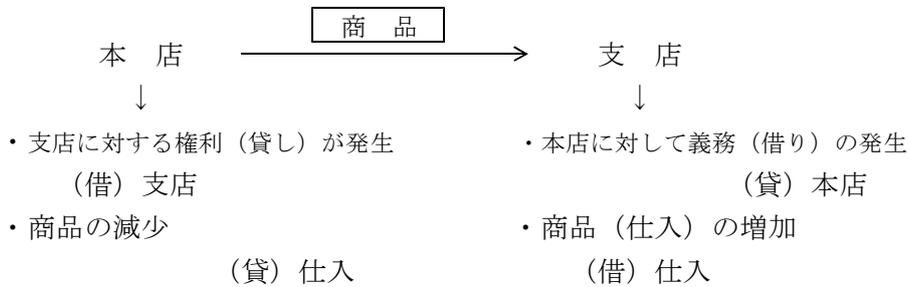
①次期以降に支払いがある
 ②その原因が当期にある



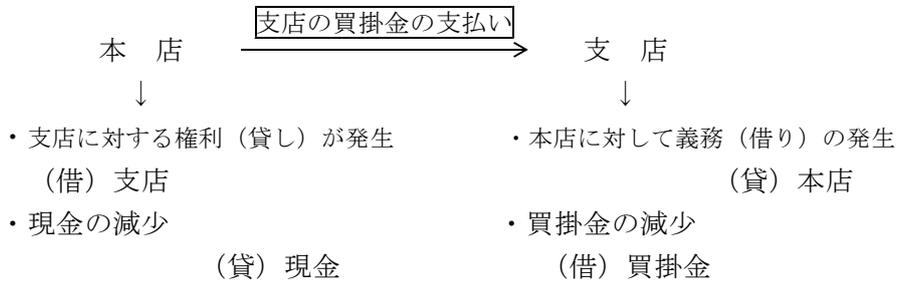
決算日 (借) 貸倒引当金繰入 ×× (貸) ○○引当金 ××
 -費用- -負債-

問8 本支店会計

1.



2.



2 本支店会計 P.112

問 1

[解答の手順]

A. 決算整理仕訳

1. [本店] (借) 仕 入 926,000 (貸) 繰越商品 926,000
 (借) 繰越商品 860,000 (貸) 仕 入 860,000 ← 1,000 個 × @¥860
 (借) 棚卸減耗費 60,200 (貸) 繰越商品 116,000
 商品評価損 55,800
 棚卸減耗費 (1,000 個 - 930 個) × @¥860
 商品評価損 (@¥860 - @¥800) × 930 個
- [支店] (借) 仕 入 624,000 (貸) 繰越商品 624,000
 (借) 繰越商品 560,000 (貸) 仕 入 560,000 ← 700 個 × @¥800
 (借) 棚卸減耗費 48,000 (貸) 繰越商品 48,000
 棚卸減耗費 (700 個 - 640 個) × @¥800
2. (借) 貸倒引当金繰入 11,000 (貸) 貸倒引当金 11,000
 本店売掛金 支店売掛金 本店貸倒引当金 支店貸倒引当金
 (¥1,192,000 + 708,000) × 3% - (¥30,000 + ¥16,000) = ¥11,000
3. (借) 売買目的有価証券 32,000 (貸) 有価証券運用益 32,000
 時 価 帳簿価額
 ¥592,000 - ¥560,000 = ¥32,000
4. (借) 減価償却費 204,000 (貸) 備品減価償却累計額 204,000
 本店 ¥1,200,000 × 0.9 ÷ 9 年 = ¥120,000
 支店 ¥ 840,000 × 0.9 ÷ 9 年 = ¥ 84,000
5. (借) 消耗品 78,000 (貸) 消耗品費 78,000
6. (借) 前払家賃 310,000 (貸) 支払家賃 310,000
7. (借) 支払利息 18,000 (貸) 未払利息 18,000
8. (借) 受取手数料 86,000 (貸) 前受手数料 86,000

B. 損益計算書の作成

1. 第 1 段階 売上原価を期首商品棚卸高、当期商品仕入高、期末商品棚卸高に分けて記載し、いったん売上総利益を算出する (テキスト P.173)

----- テキスト P.110 の P/L

損益計算書

売上原価 ××	売上高 ××
本支店合併の P/L 損益計算書	
<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 期首商品棚卸高 ×× 当期商品仕入高 ×× </div>	売上高 ×× <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 5px;"> 期末商品棚卸高 ×× </div>

売上原価
を分けて
記載

なお、問題文に「棚卸減耗費と商品評価損は売上原価に算入し、売上原価の内訳科目とする」とあるので、次のように記載する。

↓

	期首商品棚卸高 ××	売上高 ××
売上原価の内訳科目にする (売上原価の項目にする)	当期商品仕入高 ××	期末商品棚卸高 ××
	棚卸減耗費 ××	
	商品評価損 ××	
	売上総利益 ××	

金額の計算（主な項目を示す）

期首商品棚卸高 ¥926,000 + ¥624,000

当期商品仕入高 ¥4,734,000 + ¥3,090,000

期末商品棚卸高 本店帳簿棚卸高 支店帳簿棚卸高
 1,000 個 × @¥860 + 700 個 × @¥800 = ¥1,420,000

※期末商品棚卸高は帳簿棚卸高を記入する。間違いやすいので注意する。

棚卸減耗費 ¥60,200 + ¥48,000 = ¥108,200

2. 本支店合併後の商品（繰越商品）

〔本店〕 残高試算表 決算整理仕訳
 ¥926,000 - ¥926,000 + ¥860,000 - ¥116,000 = ¥744,000

〔支店〕 残高試算表 決算整理仕訳
 ¥624,000 - ¥624,000 + ¥560,000 - ¥48,000 = ¥512,000

本支店合併後の商品（繰越商品） ¥744,000 + ¥512,000

3. 本支店合併後の備品の帳簿価額

〔本店〕 試算表の備品 試算表の減価償却累計額 決算整理仕訳 4.
 ¥1,200,000 - (¥480,000 + ¥120,000) = ¥600,000

〔支店〕 試算表の備品 試算表の減価償却累計額 決算整理仕訳 4.
 ¥840,000 - (¥252,000 + ¥84,000) = ¥504,000

※備品の帳簿価額とは、備品勘定から減価償却累計額を差し引いた金額である。

4. 合併後の繰越利益剰余金

試算表の繰越利益剰余金 損益計算書の当期純利益
 ¥320,000 + ¥455,000

② [解答の手順]

$$\begin{array}{l}
 \text{(エ)} \quad \begin{array}{r} \text{総収益} \\ \text{¥13,690,000} \end{array} - \begin{array}{r} \text{総費用} \\ \text{¥12,790,000} \end{array} \\
 \text{(ウ)} \quad \begin{array}{r} \text{期首純資産} \\ ? \end{array} + \begin{array}{r} \text{(エ)} \\ \text{¥900,000} \end{array} = \begin{array}{r} \text{期末純資産} \\ \text{¥28,970,000} \end{array} \quad \text{期首純資産} = \text{¥28,070,000} \\
 \begin{array}{r} \text{期首資産} \\ \text{(ウ)} \end{array} - \begin{array}{r} \text{期首負債} \\ \text{¥12,930,000} \end{array} = \begin{array}{r} \text{期首純資産} \\ \text{¥28,070,000} \end{array} \quad \text{(ウ)} \text{ ¥28,070,000} + \text{¥12,930,000}
 \end{array}$$

問 7

(ア) 期首純資産

$$\begin{array}{r} \text{期首資産} \\ \text{¥35,300} \end{array} - \begin{array}{r} \text{期首負債} \\ \text{¥18,000} \end{array}$$

(イ) 売上原価

$$\begin{array}{r} \text{期首商品棚卸高} \\ \text{¥1,600} \end{array} + \begin{array}{r} \text{純仕入高} \\ \text{¥20,300} \end{array} - \begin{array}{r} \text{期末商品棚卸高} \\ \text{¥2,100} \end{array}$$

(ウ) 売上総利益

$$\begin{array}{r} \text{純売上高} \\ \text{¥27,500} \end{array} - \begin{array}{r} \text{売上原価} \\ \text{¥19,800} \end{array}$$

(エ) 当期純利益

$$\begin{array}{r} \text{売上総利益} \\ \text{¥7,700} \end{array} + \begin{array}{r} \text{雑収入} \\ \text{¥300} \end{array} - \begin{array}{r} \text{営業費} \\ \text{¥6,900} \end{array}$$

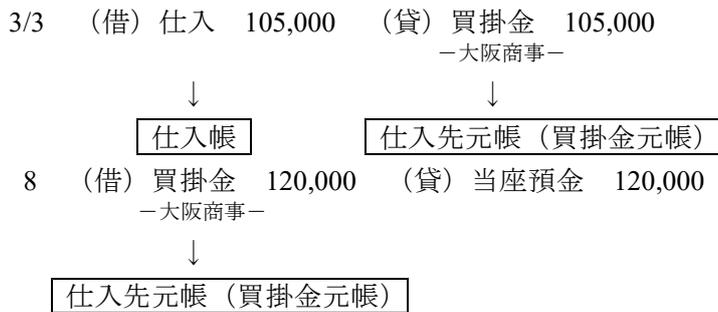
小口現金出納帳

問 8 (省略)

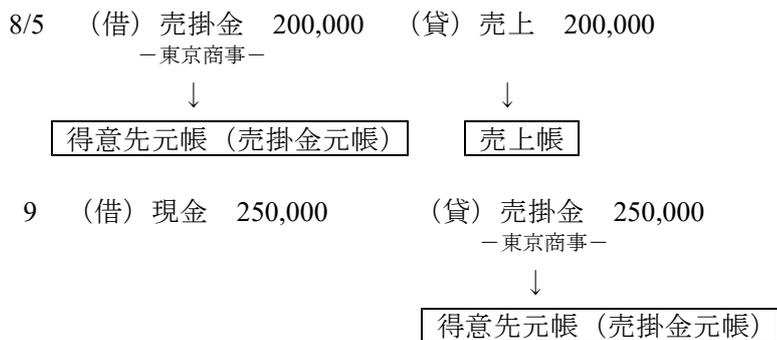
問 9 (省略)

仕入帳・売上帳関係

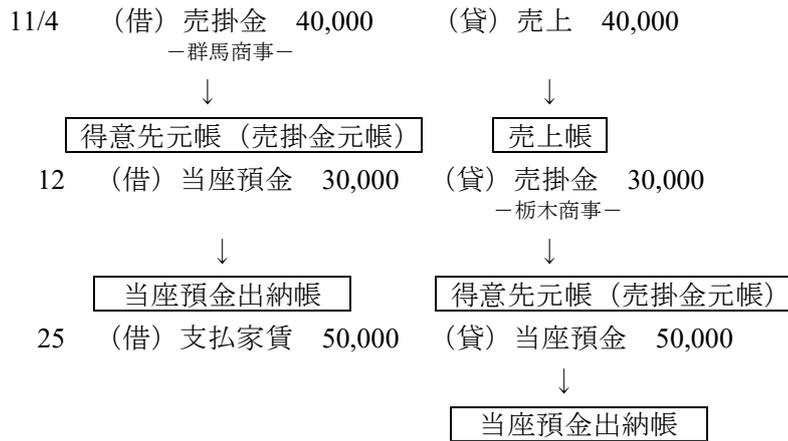
問 1 0



問 1 1



問 1 2



商品有高帳

問 1 3 (省略)

問 1 4

商品販売益 (粗利)

7月6日	7月24日
売上高 400個 × @¥220	+ 400個 × @¥250 = ¥188,000
商品有高帳 7/6	商品有高帳 7/24
売上原価 (¥11,000 + ¥36,000)	+ (¥36,000 + ¥12,500) = ¥95,500
商品販売益 (粗利)	¥188,000 - ¥95,500

伝票から勘定口座へ転記

問 1 5

伝票より仕訳をおこし、各勘定に転記する。

10/5 (借) 現金 720,000	(貸) 売掛金 720,000
14 (借) 備品 340,000	(貸) 現金 340,000
22 (借) 買掛金 170,000	(貸) 当座預金 170,000

問 1 6

1/10 (借) 現金 440,000	(貸) 売掛金 440,000
15 (借) 前払金 300,000	(貸) 現金 300,000
18 (借) 仕入 850,000	(貸) 前払金 300,000
	買掛金 550,000

精算表

問 1 7

決算整理事項 3.

減価償却費の計算にあたっては、取得原価 (この問題では¥720,000) を用いる。

残高試算表の¥576,000 を用いないように注意する。

なお、¥576,000 は、取得原価¥720,000 から、前期末の決算で計上した減価償却費 ¥144,000 を差し引いた金額である。

問 1 8 (省略)

2 日商3級対策（応用問題）P.136

仕 訳

問 1

1. 解答の手順

- ① 「帳簿残高が実際有高より¥5,000 少なかった…」より、現金過剰が¥5,000 であることがわかる。



- ② 現金過不足勘定を清算するために次の仕訳を行う。
 (借) 現金過不足 5,000
- ③ 過不足の原因が判明したので次の仕訳を行う。
 (借) 旅費交通費 3,500 (貸) 受取手数料 7,500
- ④ 貸借の差額を求めると貸方が¥1,000 少ないので、差額を雑益勘定で処理する。
 (貸) 雑 益 1,000

※受取手数料¥7,500 と旅費交通費¥3,500 の記入もれから、本来はその差額の¥4,000 だけ現金が過剰になるはずである。しかし、現金の過剰は¥5,000 である。差額の¥1,000 は原因不明ということで、決算日に雑益で処理する。

7. ・あらかじめ概算額で仮払いしていた旅費を精算する
 (貸) 仮払金 40,000
- ・旅費の総額は¥52,000 (¥40,000 + ¥12,000) である
 (借) 旅費交通費 52,000
- ・不足額は未払金として計上した
 (貸) 未払金 12,000

9. 資本的支出と収益的支出

有形固定資産の取得後に発生する支出は、資本的支出と収益的支出に区分され、それぞれ仕訳が異なる。

区 分	内 容	記帳処理
資本的支出	固定資産の価値を高めたり、耐用年数を延長させるための支出	取得原価に加算 (建物など) ×× (〇〇) ××
収益的支出	固定資産の原状を維持するための支出	修繕費として処理 (修繕費) ×× (〇〇) ××

試算表

問 2 (省略)

証ひょう

問 3・問 4 (省略)

精算表

問 5 (省略)

貸借対照表 (B/S)・損益計算書 (P/L)

問 6 (省略)

3 全経2級対策（発展問題）P.148

仕 訳

問1（省略）

問2（省略）

穴うめの計算問題

問3 〔解答の手順〕

1. 期首貸借対照表借方の商品（繰越商品）の（ ）には、仕入勘定借方の繰越商品の「112,000」が入る。
 なぜか？ テキスト P.83 決算整理事項の売上原価の計算を参照。
 決算整理仕訳を転記することで、仕入勘定の借方には期首商品が記入される。
2. 上記1. で¥112,000 が記入されることで、貸方の資本金が計算できる→¥250,000。
3. 期首貸借対照表の貸方の「資本金 250,000」は、資本金勘定の貸方の前期繰越高である。
4. 上記3. で¥250,000 が記入されることで、借方の次期繰越の（ ）が計算できる。
 →¥300,000
5. 資本金勘定の借方の「次期繰越 300,000」は、期末貸借対照表貸方の資本金の金額である。
6. 期末貸借対照表貸方の資本金が¥300,000 になったことで、同じく貸方の繰越利益剰余金の金額を計算することができる。→¥71,000
7. 期末貸借対照表の借方の商品（繰越商品）は、決算整理仕訳で仕入勘定の貸方に記入されることから、仕入勘定の貸方の繰越商品の（ ）には、「107,500」が入る。
 ¥107,500 が記入されたことで、仕入勘定の貸方の損益の（ ）が計算できる。
 →¥881,500
8. 売上勘定の借方の損益の（ ）は、貸借差額で求めることができる。→¥1,233,500
9. 帳簿の締切り手続き（テキスト P.104 参照）から、売上勘定の残高は損益勘定へ振り替えるので、損益勘定の貸方の売上は¥1,233,500 である。
10. 同じく仕入勘定の残高（売上原価）は損益勘定へ振り替えるので、損益勘定の借方の仕入の（ ）には「881,500」が入る。
11. 損益勘定の残高は繰越利益剰余金勘定に振り替えるので、損益勘定の借方の3行目は「繰越利益剰余金 32,000」となる。なお、金額は貸借の差額で求める。
 繰越利益剰余金勘定貸方の損益の（ ）に「32,000」が記入できる。
12. 繰越利益剰余金勘定の借方の次期繰越は¥71,000 となる。
 (答) 期首資本金 期首貸借対照表貸方の資本金の金額
 期末繰越利益剰余金 繰越利益剰余金勘定の借方の次期繰越高
 当期純利益 損益勘定の残高
 売上総利益 売上勘定の残高 (¥1,233,500)
 - 仕入勘定の残高 (売上原価) (¥881,500)

問4 [解答の手順]

期首貸借対照表

資産合計 1,002,200	負債合計 388,800
	純資産 613,400

期末貸借対照表

資産合計 1,194,800	負債合計 186,000
	純資産※ 1,008,800

※純資産の明細

期首純資産	¥ 613,400
剰余金配当額	- ¥ 24,600
新株払込額	+ ¥ 300,000
当期純利益	+ ?
期末純資産	¥1,008,800

∴ 当期純利益 ¥120,000

仕 入

総仕入高 1,566,000	返品高 34,800
	期末商品 202,600
期首商品 403,000	売上原価 1,731,600

売 上

返品高 135,600	総売上高 2,469,000
純売上高 2,333,400	

$$\begin{array}{rcl} \text{純売上高} & - & \text{売上原価} = \text{売上総利益} \\ \text{¥2,333,400} & & \text{¥1,731,600} \quad \text{¥601,800} \end{array}$$

損益計算書

売上原価を除く費用 X	売上総利益 601,800
当期純利益 120,000	その他収益 61,200

売上原価を除く費用 ¥543,000

商品有高帳

問 5

	15 日	28 日	30 日
純売上高	50 個 × @¥500 + (115 個 × @¥600 - 5 個 × @¥600)		
売上原価	15 日	28 日	30 日
	¥17,300 + ¥42,320 - ¥1,840		

※売上原価は売れた商品の仕入原価である。11 日の¥9,250 は加算しない。

文章問題

問 6

取引の仕訳から、勘定科目ごとにどの補助簿に記入するかを考える。

- | | | |
|--------------------|-------------------|--------------|
| 1. (借) 仕 入 300,000 | (貸) 当座預金 150,000、 | 支払手形 150,000 |
| ↓ | ↓ | ↓ |
| 仕入帳
商品有高帳 | 当座預金出納帳 | 支払手形記入帳 |
- | | | |
|------------------------|--------------|--------------------|
| 2. (借) 当座預金 3,000,000、 | 手形売却損 24,000 | (貸) 受取手形 3,024,000 |
| ↓ | | ↓ |
| 当座預金出納帳 | | 受取手形記入帳 |
- | | |
|---------------------|-----------------|
| 3. (借) 受取手形 900,000 | (貸) 売 上 900,000 |
| ↓ | ↓ |
| 受取手形記入帳 | 売上帳
商品有高帳 |
- | | |
|-------------------|----------------|
| 4. (借) 売 上 15,000 | (貸) 売掛金 15,000 |
| ↓ | ↓ |
| 売上帳 | 得意先元帳 (売掛金元帳) |

※売上の値引きは、売上高の修正であり商品有高帳には記入しない
- | | |
|-------------------|----------------|
| 5. (借) 現 金 47,000 | (貸) 売掛金 47,000 |
| ↓ | ↓ |
| 現金出納帳 | 得意先元帳 (売掛金元帳) |
- | | |
|--------------------|------------------|
| 6. (借) 買掛金 756,000 | (貸) 当座預金 756,000 |
| ↓ | ↓ |
| 仕入先元帳 (買掛金元帳) | 当座預金出納帳 |

伝票から仕訳集計表 (日計表) 作成

問 7 (省略)

精算表

問 8